

言い伝えられています。

その不思議な山は昔から頂上に登った人はいないといい、かつて札内さつないのアイヌが一度登って消息を絶ち、最近では同じ札内の長老マウカアイノ親父が数日分の食糧を持って川筋を伝って登りましたが、1つの大きな滝たきがあり、その先は近くにあった木の根に取り付いてよじ登ろうとしましたが、天がいきなりかき曇りくも、山鳴りやまながして地面が揺れゆ、物凄い勢いの雨が降りだしたので、とうとう登頂とうちようをあきらめて帰ってきました。その後、何度か同じことに挑戦ちようせんしましたが、滝まで行くと空が曇り、激しく雷かみなりが鳴るので、恐れおののいて体が震えふる、どうしてもその先には足が進まなくなっ てしまい、とうとうあきらめたという話を聞きました。

札内ではそういう言い伝えですが、浦河うらかわで聞いてみると「私たちは山の南側から登って行ってみました、頂上には1つの石でできた御殿ごてんのような立派な岩屋があり、その後ろ側に湖があります。それらが見えるところまでは誰もが狢りように行きますよ。しかし、それも谷を1つ手前に隔へだてたとこ

ろまでで、その御殿を拝おがんで帰ります。これは昔からそれ以上は近づいてはいけないと言い伝えられているからです」とのことでした。

特にこの山に登るときは海に関係のある物の名前を言うことを禁じられており、もしもどうしても言葉にしなければならぬときは名を変えて言うそうです。まず、塩はフウナこんぶ（灰）、昆布こんぶをシトカフ（ブドウのつるの皮の繊維せんいの糸）、海をトウ（沼）、舟をキツチ（桶）、鱈たらをチライ（いとう）、酒をワツカ（水）、クジラをヘイセ（息を吐く）、水豹みづひょうをシヌイ（入れ墨）、和人しやもをアチャホ（おじさん）という風にです。また、この山でとれる鹿は毛が黒く、まるで熊の毛のようだといい、本当に不思議な場所です。

同じ湖を札内側のアイヌは見たことがなく、浦河のアイヌの多くは早春の凍った雪の上を登って谷をへだてて拝んでいる、ということになります。実際に札内の長老が登った話はこの年の7月に再度立ち寄った際に、98歳のハウサナリルに聞き調べ、その後、浦河のアイヌたちにも詳くわ